気になるあの子が
僕の知らない所で
不良達の手篭めに
された話

僕は影が薄い。
存在感ゼロの僕は教室に普通にいても誰にも認知されず、下手をすれば欠席扱いにされてしまうくらいのモブキャラだ。
そんな僕の存在に何故か気付き、興味津々でちょっかいをかけてくるのが、隣の席の久保さんだった。
その日も僕…白石純太は久保さんにちょっかいをかけられていた。
「白石くんってさ、カラオケボックス行ったことある？」
「え……なんで……」
「白石君の歌声聞いたことないなーと思って。ねえ、もしよかったら今度一緒に…」
『パイン♪』
会話を遮るように久保さんのパイン(メッセンジャーアプリ)の通知音が鳴る。
「おっと……ごめんね、白石君」
久保さんがスマホを取り出しパインを確認し、少し不安げな表情をした。
「……久保さん？」
「あ、ごめんごめん。えっと、何の話だっけ……」

放課後。
いつものことではあるが、特に用事があるわけでもなかった
僕はその日、少し冒険してみることにした。
ひとりカラオケだ。
教室で久保さんにカラオケの話を振られて、ちょっと練習……
いや、好きなアニメの主題歌をカラオケで歌いたかったのだ。
それだけだ。

苦労して店員に気付いてもらい、なんとか部屋を借りる。
自分の部屋へ向かう道すがら、別の部屋のドアの窓から
人影が視界に入った。
きっと友達なんかと集まって盛り上がっているのだろう。
なんてことないはずなのに、何故だか僕はその人影が気に
なってしまい、失礼だとは思ったが遠巻きに覗き見てしまった。

中には他校の男子生徒が何人かいる様子で……
でも歌を歌ってる風でもない。
一人の男子生徒の前で女の子がうずくまって……

女の子の頭が前後に動いて……
(何だろう?まさか…これって……男のあれを
しゃぶってる……??)

（カラオケボックスでこんなことしてるなんて……
う、歌を歌う所なのに…！）

その女の子の雰囲気にちょっと久保さんっぽさを感じて
ドキドキする…が、顔までは見えない。

（いけない、こんなの覗いたらまずい……どうせ僕が
覗いてることなんか気付かないだろうけど……）

とても失礼なことをしたと自分を恥じ、そそくさとそ
のドアの前を離れた。

その日はなんだか胸がもやもやして気持ちよく歌えなかった。

翌日も、そのまた翌日も、久保さんはいつもの調子でちょっかいをかけてくる。
いつも通りの日常が続いている。
そのはずなのに、何か違和感があった。少し儚げで、影をおびて……
「それでね」
話の途中でまた久保さんのパインの通知音が鳴った。

「……っ」
通知を確認し、久保さんは一瞬、見たことのないくらい悲しい顔をした。
……彼女らしくない表情だった。

あれは何だったんだろうか。本人には聞かないが僕のもやもやは大きくなっていった。

教室で一人、誰にも気付かれずに考えこんでいると、クラスの男子がひそひそと話してる声が漏れ聞こえてきた。

「すげえ！これマジで久保さんじゃんw」

久保さんの名前にビクッとする。

何だろう。男子たちの下卑た笑み。気になる……

何だか胸がざわざわする。彼らが何の話をしてるのか確かめたい。

僕は気付かれないようにそっと近づき(普通に歩いて近寄っても多分気付かれないだろうけど)彼らの会話を盗み聞いた。

「えっぐぅ！何人相手にしてんだよこれ」

「これ相手はどこ校？お前の友達どいつなん」

「なあ、この動画俺にも送ってくれよ」

動画？なんの話だろう…

僕はみんなが食い入るように見てるスマホを覗き見た。

！！！！
画面には久保さんが複数人と男達とセックスしている…
いわゆるハメ撮り動画が再生されていた。
これって…そんな……まさか……嘘でしょ
久保さん……!?嘘だ……久保さんがこんなこと…
心臓がバクバク鳴っている。
僕が常人であったなら、心臓の音で覗き見してるのが
バレたかもしれない。
でも僕は気付かれない。
誰にも気づかれず一人、ショックに打ちのめされていた。

白石くんは影が薄い。
普通に教室にいてもみんな彼を見つけられない。
そう友達から事前に聞いていたけど、なぜか私は入学してすぐに白石君を見つけることができた。
友達がおおげさに言っていただけかと思っていたら、本当に存在感が無くて、嘘みたいにみんなは彼に気付かない。

あまりにも見つけられなくて、それがすごく面白くて、目が離せなかった。
私だけが彼を見つけられることに少し優越感のような物も感じている。

私、久保渚咲はいつものように白石君の反応を楽しんでいた。
「白石くんってさ、カラオケボックス行ったことある？」
「え……なんで……」
「白石君の歌声聞いたことないなーと思って。
ねえ、もしよかったら今度一緒に…」
『パイン♪』
会話をの途中でスマホからパインの通知音鳴る。

「おっと……ごめんね、白石君」
確認すると中学の友達から遊びの誘いだった。
用件は短く、相談したいことがあるとだけ書いてある。
卒業して数か月会ってない友人。
相談を無下にするわけにはいかないと思い、OKした。

放課後、タマや葉月が一緒に帰ろうと言ってきたが、今日は用事があるからと断り、待ち合わせ場所へ向かった。

予定通り合流し、久しぶりと再会の挨拶もそこそこに店は決めてるからと言うので友達の案内について行く。

場所はカラオケボックス。

中に入ると友達はカウンターを素通りして中に向かう。

「？部屋は借りないの？」

「別の友達がもう先に入ってるんだ、実は渚咲に相談があるのはそっちでね」

知らない人の相談……自分にそんなことできるのだろうかと
不思議に思いながら部屋に入ると、知らない男子たちが
すでにいた。
何だか不良っぽい雰囲気がする。
……白石君とは大違いのタイプ……
「あ、はじめましてー」
「へえ、めちゃくちゃかわいいじゃん」
てっきり女の子の友達かと思っていた私は想定外の光景に
面食らってしまう。
「ど、どういうこと？この人たち……」
「私と同じクラスの友達だよ。せっかくだし多い方が
良いでしょ。まあ座って座って」

こんなの聞いてない……そう思いつつも、ここまで来てしまってはいきなり帰るのも失礼かと、言われるがまま促された席に座る。
両隣に他校の男子たちが寄ってきた。
「どうもー渚咲ちゃんって言うんでしょ？あいつから聞いたよ」
「は、はあ……」
「渚咲ちゃん何飲む？これからフードもくるよ」
初対面なのにやけになれなれしい。
しばらく話に付き合って一緒に飲み食いをした。
できれば早く切り上げてもう帰りたい……
「それで、相談って何だったの？」
しびれを切らして、友達に用件を尋ねる。
「うーん…それはね……渚咲、身体は平気？」
「身体？なんのこ……と……」
そう聞かれて気付く。妙に身体がダルく、頭も重い。
呂律も何だか怪しくなってきた。

「え……何これ……」
「効いてきたみたいだね」
「渚咲ちゃん、大丈夫？こんなことされちゃっても抵抗できないんじゃない？」
隣に座っていた男が私の太ももに触ってくる。が、ろくに抵抗できず、身体がだらんとなってしまっている。
「な……なにしたの……」
「相談なんだけど、こいつらが女紹介しろってうるさくてさあ悪いけど相手してやってくれない？」
「ど、どういう……」
「じゃ、あたし帰るから！仲良くやってね！」
「ま、待って…！」
私の静止も聞かず、友達はあっさり帰ってしまった。
「もうこうなったら諦めなよwとりま楽しもうw」
「そんな……か、帰る！」
「本気で帰れると思ってんのか？」

中心人物らしき男子の前で膝をつく。
私の眼前には男のいきり立ったペニスがズボンから生えていた。
「さあ、渚咲ちゃん」
「……あの、どうしろと……」
「わかんだろ？」
「……」
私はしばらく躊躇ったあと、もう逃げられないと覚悟を決めて、
その口で初めて男のものを咥えた。
「ん……」
「はははは！いいぞいいぞ！」
「すげえ……これが渚咲ちゃんのフェラチオか……
たまんねえ……!!」
男達は興奮した様子でスマホでその様子を撮影している。
私はというと、目の前にあるそれを舐めるので精いっぱいだ。
「もっと奥までくわえてみようか」
「おごっ！？」喉の奥にまで押し込まれる。
頭を掴まれ、
（く、苦しい……！）
「歯ぁ立てんなよ。立てやがったらお前の動画ばらまくからな」
「ふぐっ……んっ……」

男のものをしゃぶらされていると、私は視線を感じ、ドアの方を見る。

（え……!?な、なんで……）

白石君がこちらを見ていた。

（こんな姿……白石くんに見られて……）

一気に血の気が引いて、顔が真っ青になる。

しかし、私と目が合うか合わないかのタイミングで白石君は目をそらす。

待って……！

「白石君！助け……」

思わず声が出る。が、その叫び声は届かず、白石君は立ち去ってしまった。

あ……ああ……白石君……

果たして見られてしまっただろうか？白石くんのことだ。

私にきづいていたなら黙って立ち去ったりなんて……でも……

考えを巡らせていると、

「なに？彼氏？やってる最中に他の男の名前出すなよw

そこに誰かいんのか？」

「いや？誰もいねえけど」

「まあいいや、彼氏くんには渚咲ちゃんから謝っといてよw」

好き勝手なことを言われる。

「ほれ、再開だ。しゃぶれよ」

「あー気持ち良い……出るわ……」
びゅるるるるるるるるるるるる！！！
「んぶぅうううう！！！」
私の口に大量の精子が注ぎこまれる。
ドプッ
「はあっ……はあ……飲め」
「……ごく……ごく……ぷはあ……」
苦くて生臭い味にむせながらも何とか全部飲み干した。

「よし、次は俺達の番な」
今度は後ろから抱きしめられ、服の中に手を入れられる。
胸を揉まれたりスカートをめくられると、羞恥心に襲われる。
「はあ……はあ……」
パンツの上からあそこを指でこすられる。
「濡れてるぜ渚咲ちゃん」
「ち、違う！これは……」
「違わないよね？感じちゃってんでしょ？」
「そ、それは……」
「正直になれよw」
「あうっ！」
クリトリスをつままれる。
「ここが良いんだろ？w」
「んんっ……んうううう」
ヴイッ
バサッ
すりっ
すりっ

そのままパンツをズラされ、直に男の指があそこの中に侵入してきた。くちゅくちゅと音を立ててかき回される。だめ……このままじゃまた……
「やめて……これ以上は……」
「やめないね。それにしても渚咲ちゃんの中あったけえ」
そう言うと男の指は速度を増して出入りしだした。周りの男子達にも聞こえるくらい激しい水音をたてる。
ビクッ
くにくに
すりっすりっ

「は、早く終わって……お願い……」
「えー？まだ始めたばっかじゃん」
そう言うと男はベルトに手をかけ、ズボンを脱ぎ捨てた。
そして、さっきよりも大きく膨れ上がったものが姿を現す。
「もう我慢できねえわ、さっさとやっちまおうぜ」
そう言うと男は私をテーブルに押し倒した。

「ひゃっ！」
「へへ、もう逃がさないからね」
「ちょっと待って……！それだけは許して！」
「ここまできてそりゃないよ。それとも何？
彼氏としかしない主義とか？」
「そういう問題じゃなくて……」
「じゃあ何だよ？」
「……」
私は答えられなかった。
初めては好きな人としたい。
好きな人……？それは……
グイッ
ギンッ

「じゃあ決まりなw」
「そんな……」
絶望に打ちひしがれている間にも、
男のモノが近づいてくる。
「力抜けよ……」
「い、嫌……」
抵抗するも虚しく、男のソレが
私の中に突き刺された。

ズッ

いやあああああ!!

「痛いいいっ……!」
メリメリと肉を引き裂くような痛みを感じる。
「おいおい、処女だったのかよ。まあいいかw」

「抜いてっ！痛いのっ！お願っ……！」
懇願も聞かず、男はそのまま腰を動かし始めた。
「動くぞ……」
「待っ……」
パンッ！パァン！
肌同士がぶつかり合う音が響く。
「やっ！あああっ！いたっ！
あんっ！ああああっ！」
「はあはあ……締まる……
すげえ……はあはあ……」
「もうやめてぇっ……」
「やめるわけねえだろ。
お前は俺達の便女になるんだよ」
パァン
パァン
パァン
わく
わく
わく
「い、いやぁ……んはぁっ！」
ピストン運動が激しくなるにつれ、男のものもだんだん硬くなってきた。

「ああ……出そうだ……」
「ダメ……出さないで……赤ちゃん出来ちゃう……！
あぐぅう!!」
ドピュルルルー!!ビュクビュクビュー!!
「あああああ……出てる……
熱い……出されてる……」
膣内に精液を流し込まれる。
「ふぅ……」
男が離れると、私の股からは血と
白濁色の液体が流れ出た。
ドピュー！
ドプッ
ビクッ
「ふふふ、これで渚咲ちゃんは俺たちの女になったな」
「うう……」

「次は俺だ！よろしく頼むぜぇ、渚咲ちゃん！」
次の男子が覆いかぶさってくる。
「やだ……やだ……やだ……いやあああ!!」
「いい声で鳴くねぇw」
わく
わく
わく
グポ
グポ
グポ
グポ
ぎちっ
ぎちっ
さっきまで処女だったのに、容赦なく膣壁を擦りながら
ペニスが出し入れされる。
「あっ……ああっ……」
「はあはあ……気持ち良い……気持ち良い……」
「こんなの……嫌だぁ…」

「ああっ出る……出る出る出る出る……!!」
どぴゅうー!!
「ああっ……」
再び子宮に熱湯をかけられるような感覚に襲われる。
ビクンッ
ああああああああ!!
ドプッ
「嫌っ！いやああ！もう許してええ！」
「渚咲ちゃん、これで経験人数2人目だねw」

「お、おおふ……こんな可愛い子の膣内に射精できるなんて感謝感謝だわ」
「お、お願いします……もう無理です…これ以上はもう……」
「はあ？まだまだ終わらねえよ！」
「俺ら全員満足するまで帰さないからな」
「そんな……」
「おい、誰かティッシュとってこいよ、まんこからお前の精液垂れてんだろw」
わく
わく
わく
わく
わく
ドピュッ
どろッ

「一人ずつやってたんじゃ埒あかねえから、全身使って奉仕しろよ」
「ほれ、もっと奥までくわえてみようか」
「んぶぅう!?」
喉の奥にまで押し込まれ、そのまま前後に動かされる。
（く、苦しい……）
「歯ぁ立てんなよ。立てやがったらお前の動画ばらまくからな」
「ふぐっ……んっ……」
一人がずっと私が犯されてる様をスマホで撮影している。
この人たちに命令されているのだろうか。一人だけ気弱そうな人だった。
ちゅぽ
くちゅ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ

「はあはあ……渚咲ちゃん……出すぞ」
「俺も……」
「僕も……！」
3人の男達が一斉に果てた。
「ごくっ……んぶぅ」
ぼんやりしていたから、不意打ちで精液が喉に流し込まれ、むせてしまう。
ビュルルーッ
ちゅぽ
くちゅ
びゅーっ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ

「げほっげほっ……んぐぅ……」
「あ～あこぼしちゃってんじゃん。飲めよ全部よぉ」
「うう……」
「おおっくぅ！渚咲ちゃん本当に処女だったのかよ？名器すぎるって」
ドクドクと子宮にも精液が流れ込んでくる。「はぁはぁ……あ……」
「ふう……出した出したw」
「次行くぜ～」
ドピュッ
はぁ はぁ
ぶびゅっ
はぁ
はぁ

今度はまた押し倒されて男たちが群がってくる。
口とあそこにペニスを突っ込まれる。
「おぐっ……おぐっ……おぐっ……」
「はは、すっげw」
「お、おごぉッ」
男の長太いペニスは私の喉元を突いて、
嗚咽が何度もでる。
「へへ、渚咲ちゃんのフェラ顔
最高だな」
ぎち
ぎち
ズコ
ズコ
ズコ
ズコ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
「可愛いブラつけてるね～」
「おっぱいはそこそこだけど、ほんといい身体だよなw」

「ひゃ、ひゃめて……お願い…んぐっ…」
「いい加減諦めろよw」
「そうだそうだ、どうせもう戻れないんだよw」
「うう……」
悔しくて涙が出てきた。
どうしてこんな目にあうんだろう。
何か悪いことしたのかな……
「そろそろいくぜ」
「うう……」
「うっ……出るっ!!」
ビクンッ
ドプッ
「ああ……」
「俺もイクぜぇぇ!!」
ビュルルルー!!ドピュッドピュッ!
んおおおおおおっ

「ああ……」
2人分の精液が私の中を満たしていく。
「はぁはぁ……これでおまんこの経験人数は4人だな」
「数えんなよw」
「まだあと3人もいるからな」
「カメラ君も頭数入れてやれよ」
さっきから撮影してる
気弱そうな人に話を振る。
ごぽッ
ドピュッ
びくびくびく
ドピュー！
「ぼ、僕……？」
「ああ、最後に使わせてやるからしっかり撮れよぉ」

「ほれほれ！もっとケツ振れっ！」
立ち上がって、今度はバックから突かれる。
「あっ……あっ……あっ……」
「はあはあ……渚咲っ！最高だよお前はッ」
パンッパァン！と激しい音を立てて腰を打ち付けられる。
「やっ！ああっ！痛いっ！あんっ！ああっ！」
びくびく
びくびく
パン！
パン！
パン！
パン！
パン！
パン！
すーすーすーすー

「いい声だねぇ渚咲ちゃん♪」
「いいぞいいぞw」
ろくな抵抗もせず、ひたすら男達に身体を好き放題される。
私はただひたすら喘ぎ続けることしかできなかった。
「ああ……出る……出る出る出る……!!」
どぴゅうー!!ビュービュー!!
ドプッ
ビクンッ
びゅーっ
「ああ……」
勢いよく膣内に射精された。複数人の精液で子宮はもう逆流するほど満たされる。
(ああ……熱い……)

「はぁはぁ……気持ち良かったぁ」
「ふぅ……ふぅ……これで全員か？w」
「いや、一人忘れてるだろw」
「ああ、そうか、でも悪りい！まだ満足してないから2周目いくわー！」
「まじかよ」
「うう……お願いです……許してください……」
「何言ってんだ。まだまだ終わらねえよ」
かく
かく
かく
かく
かく
どし
どし
どし

男子たちの欲求はますます苛烈を極めた。
口はもちろん、おまんことお尻の穴両方とも挿入される。
「うぐぅおおおおーっ」
3穴同時に挿入され、さらに両手にも握らされる。
全身を男達に使われた。
「アナルもすっごぉ……！便器の才能あるわ」
「初めてのアナルが2穴って、もう普通のセックスじゃ満足できない身体になっちゃったねw」
ぐっぽ
ぐっぽ
ズポ
ズポ
ズポ
ズポ
ミチ
ミチ
「くっそ、こいつ名器すぎ……すぐ出ちまいそうだぜ」
「こっちのおまんこもいい感じに締め付けてくるぜw」

（うう……苦しい……）
休む間もなく次々と肉棒を突き立てられる。
（苦しいよぅ……）
「はあはあ……出すぞ！全部受け止めろよぉおお！」
ドプッ
ドクッ
どびゃる
ドピュドピュドピュ！また子宮と腸内両方が熱くなる。
「ふぐぅおぉーっ！んおぉぉおお!!」

「はぁはぁ……あ……う……」
お腹の中に大量の精液が流れ込んでくるのを感じる。
身体の中も外もザーメンまみれで、もはや自分の身体に綺麗な部分など残されていない。
「ああ、またすっげえ出たわ……」
「服ももうベトベトだ……この子カラオケボックスからこれ着て帰るん？w」
「とりま渚咲ちゃん、もうぜんぶ抜いじゃおうか」
「んふぅ……」
どく
どく
どく
ゴク
ゴク
ゴク
どく
どく
どく

「んほぉッ!?」
制服を全部脱ぐと、すぐにまた輪姦が再開される。
お腹の中、膣壁ごしに二本のペニスが擦れあう。
(破けちゃう……!)
男子たちは若い性欲だけで無責任に私の身体にむしゃぶりつく。
「はぁ、はぁ、渚咲のおっぱいやわらけえ~」
「小ぶりだけどそそる身体してやがるぜっ」
「うう……んっ……」
パンッ!
パンッ!
パンッ!
パンッ!
ぎち
ぎち
かく
かく
かく
かく
かく

「あ〜もう我慢できねえ……いくぞっ」
ドピュッ！ドピュッ！ドピュッ！ドピュッ！
「んひぃい！い、いやだぁ！」
「俺もいくぜぇぇ!!」
ドピュッドピューー!!ビュルルルー!!
「ひゃめぇぇぇ!!」
またおまんことお尻の穴の
両方から大量に流し込まれる。
ドプッ
あっ
あっ
あっ
ビクッ!
わわあああああ!!

「はぁはぁ……はぁはぁ……」
「おぉお……おっ、おほぉ……おっ」
「渚咲ちゃん、膣内出し気持ちいい？
何回も何回も射精されてお腹たぷたぷになっちゃったね！」
今もなお精液を放出しながら男達は笑う。
「こんなの……酷いよぉ……！」
「おいおい、まだ終わりじゃないんだから泣くんじゃねえよw」
まだ終わらないのか……。
びゅっ
どびゅる
どく
どく
どく
どく
びく
びく
びく
びく
わく
わく
わく
わく
わく
私は絶望に打ち拉がれながらも、
どこか冷静だった。
（私……これからどうなるんだろう……）

「さすがに疲れてきたわw」
「俺はまだまだいけるけどな」
前も後ろも、入れ替わり立ち代わり男子たちのペニスをねじ込まれ使われる。
「渚咲ちゃん、僕のも舐めて♪」
「フェラ上手だねぇ♪」
かく
かく
かく
かく
かく
かく
ちゅぽ
くちゅ
グポ
グポ
グポ
グポ
「うう……うぶっ……」
顔にも髪にも、胸元にも容赦なく精液をかけられていく。
身体中ザーメンまみれでもうドロドロだ。

「オラッ孕め！渚咲!!」
本日何度目かの射精。
「ああ……ああああああああああ……」
ビクンッ
ビュルルッ
ズプッ
子宮も腸内も、胃袋までも精液で満たされる。
数時間前まで処女だったとは思えない姿に成り果てていた。

「はぁはぁ……はぁはぁ……」
「ふぅ……気持ち良かったわw」
「じゃあ次は俺ねw」
「うう……」
延々と続く凌辱に私は疲労困憊だったが、男達は疲れを知らない。
バトンタッチしてまたさっきの男子が挿入ってくる。
私は何度も犯され続けたのだった。
かく
かく
かく
かく
かく
びく
びく
びく
びく
どく
どく
どく
どく
ごぽっ

「ふぅ…ふぅ……ふぅ……」
あれから何時間経っただろう。もう時間の感覚もない。
（どうして……私がこんな目にあわなくちゃいけないの……？）
泣きたいけれど涙すら出てこない。
「うっ……」
わく
わく
わく
わく
わく
びく
びく
びく
びく
ごぽ!!
お尻の穴から男達の出した大量の精液が逆流してくる。
「ううっ……くっ……」
身体の奥底まで汚されたような気分だ。
「はぁはぁはぁはぁ……」
全身をザーメンまみれにして床に横たわる。

「そろそろか、じゃあ俺たち帰るから！」
「またねー！渚咲ちゃん！」
「おい、お前の番だぞ。後はちゃんと片付けろよ」
「あ……はい……」
撮影係の男の子にそう言うと男子たちは帰っていった。

プルルル……プルルル……
部屋のインターフォンが鳴る。
退室時間を知らせる電話だろう。撮影係の男の子が電話に出る。
「あ……はい、はい。すいません……その……延長で」
受話器を置くと、男の子は血走った目で私を見る。
「やっと僕の番なんだ……久保渚咲さん、セックスしようね……」

――それから数週間たった。
私はいつも通り学校に通い、いつも通りの生活を送っている。
あの日の直後、白石くんに話しかけるのはかなり緊張したが、
彼はいつも通りのようすだった。
カラオケボックスで見た彼は見間違いだったのか、
それとも彼が私だと気付いてなかったのか……

真相はわからないが、知っていたら彼はこんな
ポーカーフェイスはできないと思う。
「……良かった…」
「……何が？」
「……何だろうね」
本当、何が良かったのだろう。
スマホのバイブレーションが振動する。
……また呼び出しだ。

あれから毎日のように、写真に脅される形で男たちと会い、そこでまた犯されている。
徐々にもう快楽に負けてしまったほうがマシだと考えるようになり、セックスに溺れていった。
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
「いいぞぉ！渚咲！」
「はぁ、はぁ、おちんちん熱い……！」
淫靡な音を立てて、男たちのペニスをしごく。
ボタタッ

「あはぁあ～あっ、あひぃ……」
私の身体が男達の手で変えられていくのがわかる。
つい最近まで男を知らなかったのが嘘のように、セックスに最適化していく。
びゅーッッ♥
びゅーッッ♥
ボタタッ
「はぁはぁはぁ……」
「渚咲ちゃん、可愛いよ」

「あはっ、あっ、あちゅい……ふわぁ…」
顔にも胸元にも精液をかけられる。
この瞬間が一番気持ちいい。
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ドロッ
「ふぅ……渚咲ちゃん最高だよ」
「ありがとうございます……」

「すっげえ!!こいつは名器だぜッ」
男達は必死で私の股に下半身を打ち付けてくる。
「んおっ、おほっ、おぉおお!」
まるで獣のような声を上げながら、
私は今日も犯され続ける。
「ああ、渚咲ちゃんの
おまんこきもちいいよぉ」
「あん、ああ、はぁああ……」
わく
わく
わく
パァン
パァン
パァン

「出すよ？中に出してあげるからねぇ」
「ああ、はぁ、はぁ、はぁ……」
どぴゅっ、どぴゅーっ！！！
「はぁあ……熱っ……あぁ……」
こうして私、久保渚咲は汚されていく。
そして堕ちていく……。
ドピュー！
ドプッ
どっ
んっはあ～ッあああッ

「気持ちよすぎてすぐ出しちまった」
「はい交代交代！」
「次は俺な。渚咲ちゃん、入れさせてね」
「あひぃ…は、はいぃ……」
まだまだ終わらない陵辱劇。
私の日常は壊されてしまった。
あひっ♡
あぃい♡
びゅっ
どびゅる
かく
かく
かく
かく
かく

「おおっ！これは確かに最高だなっ！」
相手をする男子たちの顔触れは毎回微妙に違う。
はじめて見る顔もちらほらあって、このことを
知る人間が増えていることに不安に思う。
「ひぎ…っぃ…あぁあっ！」
わく
わく
わく
グポ
グポ
グポ
グポ
ぎちっ
ぎちっ
「やべぇ……もう我慢できねえっ」
「ああ……ああ……ああ……ああ……」
パンパンパンと肉のぶつかり合う音が響き渡る。

「あああああああ～～～～！イイッ！もっと激しく突いて下さいっ!!」
気付いたら卑猥な言葉を使って快楽を求めている自分がいる。
変わっていく。
「うおぉっ締まるっ……うっ、イクっ……いくっ……ううっ」
ドピュッドピュ――――――――!!
ビクンッ
わ あ あ
あ あ あ
あ!!
ドプッ

「はぁはぁ……お腹いっぱい……」
膣内に大量の精液が流し込まれる。
「はぁはぁ……はぁはぁ……」
「渚咲ちゃん、僕ともお願いね」
「はぁはぁ……はい……」
どろッ
わく
わく
わく
わく
わく
ドピュッ
「あふぅ……」
「じゃあ次俺な」
「次は僕の番だからね」
「はい……よろしくお願いします……」
身体中ザーメンまみれにして私は笑う。
こうして私、久保渚咲の日常は汚されていった。

……スマートフォンの中の久保さんは普段の彼女とはまるで別人のようだった。
淫靡な表情で知らない男の人たちとまぐわっている。
「なん……で……」
こんな久保さんは見たくない、けど、目が離せない。

「白石君……見ちゃったんだ……」

ビックリして振り返ると、いつの間にか久保さんが立っていた。
「く……久保さん……！？」
「白石君には知られたくなかったな……」
そう言って彼女は男子たちの手からスマホを奪う。
「あ……うう……」
言葉が出ない。目の前にいるのは本当にあの優しかった久保さんだ。

「私ね、こんなふうに毎日何人もの人とエッチなこと……してるんだ……」
自嘲気味に言う彼女の姿は痛々しげだった。
「もう……ダメなんだね」
久保さんはスマホを男子たちに返し、教室を出ていった。
……その日を最後に、久保さんが学校に来ることは無かった。

教室を飛び出した私はあてもなく外を歩いていた。
もう学校には行けない。家族になんて言おう。
目の前が真っ暗だった。

「あれ？久保さんじゃん」
声をかけられて気付く。他校の男子生徒たちがこちらに近づいてくる。
「俺のこと忘れた？中学一緒だっただろ」
そう言われて、知った顔だと気付く。でも記憶よりずいぶんチャラチャラした姿になっていた。
「驚いたよ、まさかあの久保さんがこんなことしてるなんて」
そう言ってスマホの画面を見せる。……どこまで拡散しているのだろう。

「俺ずっと久保さんとやりたいと思ってたんだよね。俺達とも遊んでよw」
そう言って下品に笑う男子たち。

「あ……いや……それは……」
「いいだろ？」
肩を掴まれる。
振りほどこうと思ったが、その気力がわかない。

（もう……どうでもいいか……）
「いいよ、遊ぼう」

流されるまま男子たちとラブホテルに入る。
「すごい…！あの優等生だった久保さんが俺のチンポ舐めてる…！」
「んむ……ん……んちゅ……」
「おい、こっちも頼むぜ」
「んふぅ……んちゅ……ちゅぱっ……」
「すげえ……これが噂の名器って奴か……」
「ああ……ああっ……気持ち良いです……」
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ

「ああ、俺も出そうだ……出すぞっ……!!」
どぴゅっどぴゅっどぴゅっ！
「あはっ……あつい……気持ちいい……」
さっき会ったばかりの人達と、何度もセックスする。
快楽と背徳感が入り交じった感覚に酔いしれる。
ビュルルーッ
ちゅぽ
くちゅ
びゅーっ
ブッ
ド

はぁ……はぁ……はぁ……」
「まだできるよな、渚咲ちゃん」
「はい……もっと、もっと下さい……」
こうして私の日常は一変した。
ぶびゅっ
はぁ はぁ
はぁ はぁ
ドピュッ
ドロッ

毎日学校に行かず不良たちと会って、セックスの相手をする。
時には知らないおじさん達に身体を売ってお金を渡す。
「うぶ…ぅふぐぅ…うっ」
「おお…渚咲ちゃん……肉便器の才能あるよ！」
ズコ
ズコ
ズコ
ズコ
きち
きち
わく
わく
わく
わく
わく
すっちゃ
すっちゃ
すっちゃ
「はぁはぁ……ん…っんんぅ…っ！」
今日も私は、知らない男に犯されて悦んでいる。

「たっぷりと中に注いでやるぞ！」
「んおおおぉッ」
ビクンっと仰け反りながら絶頂を迎える。
んぉっ♡
んぉっ♡
ドプッ
ビクンッ
ムフフフ～ぅ
んほおおおぉぉ

「こっちも出すぞッ！」
「ふぐぅーっ！んぐっ！んんぶうう！」
喉奥までペニスを突っ込まれ、口の中いっぱいに広がる精液の味。
「はぁ……はぁ……」
ドピュッ
ドピュー！
びく
びく
びく
びく
びゅーっ
「あひぃ……」
何度も膣内に射精されてお腹の奥が熱い……。

「ひ…っやぁ…っ！身体が壊れちゃうッ」
パンパンパンパンパンパン！
「うへェ…スッゲ！ギチギチに締まってるッ!!」
「ひぎぃいっ、激しすぎますぅ……ふわぁ……
ああ……ふわああん……っ」
びくびく
びくびく
パン！
パン！
パン！
パン！
パン！
パン！
すーすーすー

子宮口を突かれる度に、意識が飛びそうになる程の快感に襲われる。
「くぅ……また出る……イクイクイクイクイクゥウウッ！」
ビクンッ
ああああああああ!!
ドプッ
びゅーっ

「はぁはぁ……おほぉおお……おっ」
「次は俺の番だぜ」
「ま、まって……まだ…イってりゅ…おぉお……」
かく
かく
かく
かく
かく
どく
どく
どく
休む間もなく次の男の人が入ってくる。
「おほっ、お、おおっ、おほぉおおおお〜っ！」

「ははははっ！このマンコ最高だよォ！」
「へは…っん…ふぅ…っ」
全部の穴に一気にペニスを突っ込まれて蹂躙される。
「はぁはぁ……あひぃ……んふぅ……あひっおごぉおッ……」

ぐっぽ
ぐっぽ

ズポ
ズポ
ズポ
ズポ

ミチ
ミチ

「あふぅ……はいぃ……んぐっ私、肉便器れすぅ……」
もう何も考えられない。ただひたすらに快楽を求めるだけの淫らな雌豚。

「あ……ああっ、ふぐっ…うむぅ……んぐうううう！」
「ああ、俺もだっ」
ドピュッドピューーーーーーー!!
「んぐっ！んグゥウーーーーッ！」
ビクビクと痙攣しながら盛大に潮を吹き上げる。
「ぷはぁ……はぁはぁ……はぁはぁ……」
ドプッ
んほぉぉぉ

「まだまだ行くぜぇ」
「はひぃ……んぐっ…あひがとうございまふっ…
んぐ…もっと使ってくだはいぃ……」
来る日も来る日も、私は男達の性処理道具として
弄ばれ続けた。
学校に行ってないことが家族にバレて、
家出してからは起きてる間はずっと
セックスする生活になって
……私はもう戻れないところまで来てしまった。
でももうどうでもいい。こんなに気持ちいいんだもの。
びゅーっ
どく
どく
どく
ごく
ごく
ごく
びく
びく
びく
びく
びく
どく
どく
どく

そして数か月後、散々膣内射精され続けた私は妊娠し、臨月を迎えようとしていた。

「渚咲ちゃん、立派なお腹になったねw」
「はう…んぁあ…っ」
「おろすのかと思ってたのに結局そのままになっちまったな」

このお腹になっても、男たちは私の身体を求めてくる。
お腹の赤ちゃんのことなんかお構いなしに私の中に射精する。
「そろそろ産まれるんじゃない？」
「ああ、そうだな。俺たちも楽しみにしてるよ」
「はい……頑張ります……」

びくん♥
びくん♥
びくん♥
びゅーッッ♥
びゅーッッ♥
んっはぁ〜あああッ
ぴゅっ♥
「ほれ、出産祝いだ！受け取れ！」
「私の身体に熱々の精液が降り注ぐ……
「んはぁあ♡熱いいい…！はぁあ」
「ぶはっ！母乳出てら！」
「はぁ……はぁ……んあぁあ」

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ドロッ
「ははは っ！母乳まだ出てるぜw」
「うう……恥ずかしいですぅ……」
「じゃあ今度は俺が出す番だな！」
「はい……お願いします……」
そう言って私はまた男根をしゃぶり始めた。
「んぶっ……んちゅ……じゅぽ……んんぅ……んんんっ」

「こんな腹して締まるなぁ……最高だ！」
「おほぉおっ！赤ちゃんがつぶれちゃうッ……んほぉお」
「そらそら！どんどんいくぞ！」
「んひぃいっ、激しいッ、ダメッ、そんな激しくされたら、またイっちゃいます……っ、イグゥウウッ！」
ズコ
ズコ
ズコ
ズコ
ズコ
かく
かく
かく
かく
かく
ぎち
ぎち
正
正
正
正
正

んおおお

「はぁはぁ……はぁはぁ……」
「あひゃぁ……ん……ふぁあ……あへぁ……」
「おいおい、休んでる暇はないぜ」
「あひぃい……ま、まって……今イッたところだからぁあ……あへぁあああ」
休む間もなく次の男がやってくる。

「ぐちょぐちょマンコが絡みついて来やがる！」
今度はバックで2穴を突かれる。先ほどよりもっと深く、
膣穴をえぐる。
「ひゃう…いやぁ…あっあッあああ……ッイグッぁあ」
「清純そうな面してたのに、とんだ淫乱女になっちまったなぁ！」
「は、はいぃ……わ、わたしは淫乱肉便器れすっ！あひぃいい」
パンッ！
パンッ！
パンッ！
パンッ！
ぎち
ぎち
かく
かく
かく
かく
かく
子宮口を何度もノックされて
意識を失いそうになる。

「ひぎぃいい！またイクッ！
またイクゥウウッ！」
「またイキそうなのか？
なら、たっぷり種付けしてやる！」
「ひぎぃいっ！中はだめぇ！
あかちゃ……溺れちゃ……ッ！
んほぉおおおおおお！！」
「イクゥウウッ！」
ひぃぃぃぃッッ
ドプッ
ビクッ
ビクッ
ぴゅっ♥
びゅーーーー♥

「はぁ……はぁ……ザーメンいっぱいぃぃぃ…はぁあ…」
「まだまだ行くぜ！」
「はい……もっと……もっと下さい……」
こうして私は、今日も快楽に身を委ねる……。
「はぁ……はぁ……はぁ……んふぅ……」
「まだできるよね、渚咲さん」
「はい……まだまだできます」
びゅっ
どびゅる
びく
びく
びく
びく
わく
わく
わく
わく
わく
わく
どく
どく
どく
頭を空っぽにして、
見にくい現実から目をつむる。

「フーッ…出した出した」
「じゃあ渚咲ちゃん、俺ら晩飯食べに行くから部屋の掃除しとけよ」
「は、はい……わかりました……」
「さすがは肉便器だな！」
「あ……ありがとうございます」
私は肉便器。男達に犯されるためだけに生きている。
でも、それでいい。私は肉便器。
それが今の私にとって一番幸せなことなのだから。
わく
わく
わく
わく
わく
びく
びく
びく
びく
ごぽ!

「久保さん……」
「……えっ……」
男達と入れ替わりで、男の子が入ってくる。
男達はすれ違ったその子に気付かなかったようだ。
「遅くなって…ごめん。その……ずっと探してたんだ。ごめん……本当にごめ…ん」
「……どうして泣いてるの」
「ごめん……こんなにボロボロになってるなんて思わなくて……」
「……」
彼が何度も何度も謝る。私は黙ってそれを聞いていた。
これはきっと夢だ。都合のいい幻だ。幻の彼が私に手を差し伸べる。
「一緒に帰ろう、久保さん」
私は、その手を取った。
-終-

正
下正
正

正
下正
正

正
下正
正

正
正正
正
下

正
正正
正
下

正 正 下 正 正
正 正

正 正 下 正 正
正 正